加齢によって罹患しやすい眼の病気

9月医学健康講座

歳を取ると白内障や緑内障といった眼の病気にかかる人が多くいます。9月21日(金)に総合南東北病院で開かれた9月医学健康講座では、南東北眼科クリニックの小野田貴嗣医師が「加齢によって罹患しやすい眼の病気」と題して講演しました。講演内容を要約し、高齢者に多い眼の病気と治療法について考えます。

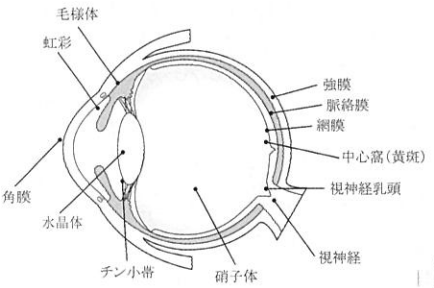
眼の病気と治療法について講演する小野田医師

本日は加齢によってかかりやすい白内障、緑内障、加齢黄斑変性などの眼の病気についてお話しします。

白内障は水晶体が濁る病気で、まぶしい、目がかすむ、明るい所で見えにくい、視力低下などの症状が出ます。

歳を取ると程度の差はあれ、ほとんどの人がかかります。治療は生活に不自由がない段階であれば、点眼薬で進行を抑えます。進行している方は一般的に「超音波乳化吸引術」という手術を行います。角膜をわずかに切開し、そこから細い器具を眼球内に入れて超音波で水晶体の核と皮質を細かく砕き吸い取ります。後嚢（水晶体の後方の膜）だけは残しておいて、そこに眼内レンズを取り付けます。手術は5分から10分程度で済みます。

眼球の構造



白内障、緑内障、黄斑変性など

眼内レンズにはピントが合う距離が1つの単焦点、遠近両用の多焦点、乱視矯正用のトーリックがあります。どれを選ぶかは患者さんのライフスタイルや趣味、性格を踏まえて考えた方がよいでしょう。多焦点は神経質で完璧主義の方や、仕事で夜間に運転する方などはあまり向いていないようです。多焦点眼内レンズですと、先進医療となるので保険が適用しません。ただし、生命保険では「先進医療特約」がある場合もあります。トーリック眼内レンズは正乱視を軽減させることのできる眼内レンズで、白内障と乱視を同時に治療することができます。トーリックの使用は乱視量が1・5D以上の患者さんに推奨します。

次に緑内障ですが、これは主に眼圧が高くなることで視神経がダメージを受け、見える範囲が徐々に狭くなっていく病気です。視神経は一度失われると元に戻りません。中途失明で最も多い原因が緑内障です。

眼圧は眼球内を流れている房水の排水部分が目詰まりを起こし、房水が溜まる一方となり高くなります。眼圧の正常値は10～21mmHgですが、時間によっても多少違います。朝は高め、夜は低めです。治療は、眼圧を下げる点眼薬から始めます。薬だけでは効果が不十分な場合はレーザー治療や手術によって房水が流れるようにします。

緑内障は、早期のうちは自覚症状がほとんどありません。片方の眼だけ視野が欠けても両目では普通に見えるので気付かない場合が多いのです。従って人間ドックなどで検査を受けることが大切です。

次は加齢黄斑変性（滲出型）です。これは網膜のほぼ中央にある黄斑に異常な新生血管が生え、視力が低下したり物が歪んで見えたりする病気です。最近の治療では眼球に薬を直接注射する方法や、レーザー光で新生血管を焼きつぶす方法などもあります。加齢黄斑変性から視力を守る鍵は早期発見に限ります。

次に近視が加齢とともに招く病気ですが、大部分は学童期の近視進行で眼軸長（角膜から眼底までの距離）が伸びすぎることで起こる軸性近視です。強度の近視の方がかかりやすく、壮年期になると黄斑変性症、網膜剥離、緑内障などを招きやすくなります。

近視の進行を抑えるには学童期にオルソケラトロジーを行うのが有用です。これは特殊な形状のハードコンタクトレンズの裏面で角膜を圧迫して、角膜のカーブを変えることによって、近視や乱視の屈折矯正を行う治療法で、当院はこの治療ができる認定施設です。

9月の手術件数

9月の手術件数は593件でした。内訳は眼科165件、外科109件、形成外科74件、外傷センター53件、整形外科42件、泌尿器科30件、耳鼻科28件、脳神経外科25件、心臓血管外科20件、歯科口腔外科16件、呼吸器外科12件、陽子線センター5件、放射線治療科4件、放射線科3件、小児心臓外科2件、消化器内科2件、周産期センター1件、麻酔科2件です。

9月の救急車台数

9月の救急車台数は506台。時間外の受診患者さんは1412人でした。